

第30回女性協定期大会

参加単組をもっと増やそう

10月4～5日・東京



女性協議会

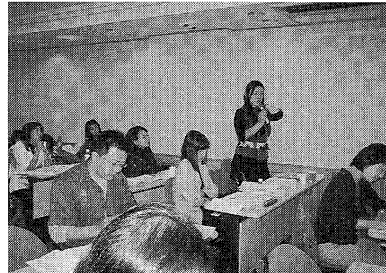
労連女性協議会第10回定期大会が10月4日と5日、東京都内の全労連ビルとエデュカス東京を会場に開催された。参加は六地連一九単組一支部連と本部から六人の計三十二人だった。

一日目は議長に東北放送労組の松下聡子さんを選出し、川村高子女性協議会書記、阿座上泰宏本部中執の挨拶のあと、女性協任から議案書として「課題別方針」の説明がされた。また、当日実施したアンケートの回答をもとに、パネルディスカッションが行われ、さまざまな意見交換がなされた。

二日目は地上デジタル放送の開始を目前に熊谷英之本部中執から話を聞いたあ

と、各単組の制度・発表の手直しを検討するのを話し合い、財政報告、2003年度の役員選出がされ、議案を採択し、二日間の日程が終了した。

昨年からは、大会参加の単組が少ない傾向にあり、特に関東、近畿が規模からみて少ないので、参加単組を増やすことが今後の課題となった。



さまざまな意見が出された

パネルディスカッション

せっかく全国から集まったので話そう！と、全員参加のパネルディスカッションを行った。会場内で事前①産休・育児のボジティブアクション

① 産休・育児は今や当然！という回答も多く、身近な例も増えているが、やはり本人の「精神的負担」や「やりたい仕事」とのジレンマはある。同時に職場結婚での産休復帰後の夫の転勤という「家族責任」を無視した、嫌がらせ人事の例が報告され、男性の育児休暇の例は出てきたものの、「当然」という状態には相違ない状態といえる。

② ガラスの天井を感じますか？という問いに「ガラスの天井って何？」という疑問もでた。実際に女性管理職や役員もいるという会社もあった。だが衆知のとおり日本の女性管理職比率は極めて低水準であり、なかでも民放は社員の比率

かしても少ない。昇格を望まない」という声もあるが「差別がない」と「感じない」との間には大きな差があるといえる。

③ 差別に対してはたかっしてきた層と均等法以降の若手層との間の継ぎがいないといわれているが、女性部が活発に存続している組合では、職場でも女性の昇格がきちんと行われ、両輪でバトンタッチがなされているともいえる。また最近では女性の雇用形態の変化が著しく、その二極化が障害となっている事実は組合組織以前の問題といえる。

④ 不安に思うことについては自分の健康や結婚、子育てからローカル局の今後の生き方まで、さまざまな回答があった。中でも「心の病気は最近注目されており、九州地連では今年メンタルヘルスのアンケートを行なった。長時間労働と家庭の両

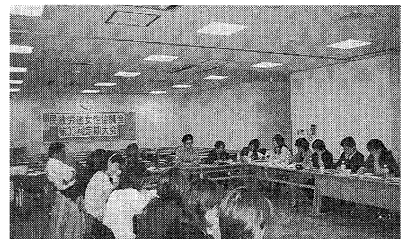
地上波デジタルを学習

とうとう開始となる地上デジタル放送は女性協にとっても興味深い問題である。

定期大会二日目に、青年

協担当中執・熊谷英之さんを講師に迎え、デジタル放送で何がどうなるのか、これからの問題は何か、について質疑応答を中心に話が進められた。

まず技術的な側面よりデジタル化の進行状況が説明された。その中で「知っておかなければならないことは何か？」という疑問もでた。さらにCATV、プロードバンドの活用で、例えばキイ局の放送を地方で視



デジタル化の話を真剣に聞く参加者

2003年度常任委員

岩田 牧子 (テレビ東京労組)
曾我 有紀子 (日本テレビ労組)
神内 美香子 (NTV映像センター労組)
中井 幹子 (テレビ朝日労組)
秋信 裕子 (広島テレビ労組)
川村 高子 (熊本放送労組)

※議長・副議長・書記長の選任は今後の常任委員会で決定します。

聴けることも話題に上った。問題はデジタル化への投資に留まらず、特に地方局は存在そのものが問われることになるだろうことを感じた。しかしまたデジタル放送の準備が各局内でも整っておらず、メーカーの対応も追いつかないという現状が説明された。地上デジタル放送開始による不安感是非常に漠然としている。放送に携わる者として、これからもこつた勉強会によって、何が起きているのか知っておく必要があるだろう。